



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association

2015.4 第59号



提◆言

これからの日本の養豚に求められること

日本SPF豚協会副会長
㈱シムコ代表取締役

鈴木 保

昨年はPEDの爆発的流行で始まり鶏インフルエンザの発生で終えた疾病の1年でした。PEDは現在も各地で流行を繰り返し、隣国では口蹄疫が広がり、人では世界的問題としてエボラ出血熱が未だ先が見えず、国内でもデング熱が大問題になりました。このように科学が進んだ現在においても、次から次へと現れる疾病への対応は、気候などの自然同様になすすべもありません。また、畜産業界にとって本年はTTPや各国とのFTAが具体的に進み、輸入負荷が大きく軽減される事態となります。

今後、特に中国を中心とするアジアでの食用たんぱく質の需要が大きく伸び、供給がまったく追いつかない状態が拡大していくと予想されますが、中でも豚肉の要求が最も大きいとされ、早期の生産拡大がアジア各国で望まれ進展中です。

したがって、将来日本に海外から十分な豚肉が供給される担保はなく、国内生産がますます重要になると考えられます。まして日本人が好む肉質が海外で生産されるとは到底思えず、今後国産豚肉の真の価値が問われることになるでしょう。

生産性に目を移すと、ヨーロッパを中心に多産系の母豚が年間30頭以上の肉豚を作り出しています。また繁殖性だけでなく出荷日齢が160日台であり飼料要求率が2.7以下と発育・生産効率も優れています。しかし、このような成績がどんな環境でも達成できる訳ではありません。育種とともに設備、栄養、衛生、手技が同時並行的に発展し成果をもたらしているのです。種豚だけが脚光を浴びがちですが、周囲環境も整えねば成績の大きな向上は望めません。

日本は、温暖化に伴い変化はあるものの四季が明確であり、南北の緯度差が大きいことから、年間を通じて気温差が著しく大きく、湿度も高く地域によっては降雪量も半端なく多いなど、飼養環境が大きく異なります。一定の高成績を維持するためには、これらの環境変化を平滑化する必要があります。それはそのまま設備の増強を意味します。空調や断熱などの豚舎構造であ

ったり、器具・機材、機械装置の場合もあります。これらは同時にエネルギー費および償却費を増加させ、生産原価を引き上げます。原価を引き下げるためには要求率改善による飼料費減、総出荷重量増による全体の固定費減等が必要です。成績向上でコストダウンできた範囲で設備を更新すればいいのですが、売価がコスト低減以上に高い(利益)場合はともかく、安いと数量が増加した分だけ損が増加する構図が生まれます。

また、欧米の種豚は安価で廃豚代が高いことから更新率が高く、日本のように6産以上の高産次実績の必要性がありません。国内で海外ブランド種豚を用いる場合、そのことがリスクになると考えられます。更新率を低く抑えつつある程度の生産性を得るためには、頑強な骨格と前後駆のバランス、柔らかな関節を持った適度に大型な種豚である必要があります。大きく長くなり過ぎるとバランスが崩れ、歩様や肢蹄の故障が発生します。

高生産性と言われる最近の欧州種豚は早熟で、初産から高い繁殖性を発揮します。前述の通りその連続性は未知数ですが、我々日本のブリーダーも感心しているばかりではなく、見習うべき所はあります。初産から産子数ばかりでなく生時体重も大きく、高い哺乳育成率、安定した乳量を維持し、肉豚は発育も早く要求率も低い。さらに肉質、歩留まりも満足させなくてはならない。これら総てをどのようなバランスと重要度を持たせて造成していくかが我々の今後の仕事となります。

これらを達成するためには環境の整備も同時に必要となります。成績を達成するための飼料とフェーズ、場所に応じた合理的・経済的な豚舎設備、きめ細かな飼養管理、何よりも重要なSPFに代表される衛生管理、を突き詰めていく必要があります。

まだまだ日本の養豚界には課題が山積みですが、一つ一つクリアした先に、日本から高肉質の豚肉が世界的ブランドとして、多くの国に輸出される将来があることを信じて疑いません。

SPF種豚と認定農場の分布

(2015年3月末現在)

表1. 認定農場の分布

| 飼養母豚数 | 北海道 | 東北 | 関東 | 北信越 | 東海近畿 | 中四国 | 九州 | 合計 | 母豚総頭数 |
|-----------|-------|--------|--------|-------|------|-------|--------|-----|--------|
| 99以下 | 1 | 0 | 3 | 0 | 0 | 2 | 0 | 6 | 363 |
| 100～299 | 6 | 7 | 29 | 4 | 0 | 1 | 6 | 53 | 9,665 |
| 300～599 | 6 | 4 | 7 | 3 | 1 | 9 | 8 | 38 | 15,469 |
| 600～999 | 2 | 12 | 3 | 2 | 0 | 1 | 8 | 28 | 22,852 |
| 1,000以上 | 0 | 10 | 3 | 0 | 0 | 2 | 9 | 24 | 31,787 |
| 計 | 15 | 33 | 45 | 9 | 1 | 15 | 31 | 149 | 80,136 |
| 育成・肥育専門農場 | 0 | 4 | 10 | 5 | 0 | 1 | 13 | 33 | |
| 合計 | 15 | 37 | 55 | 14 | 1 | 16 | 44 | 182 | |
| 母豚総頭数 | 5,096 | 26,438 | 14,598 | 3,441 | 0 | 7,457 | 23,106 | | |

表2. 認定農場数および飼養母豚数の推移

| 地域 | 2010年度 | | 2011年度 | | 2012年度 | | 2013年度 | | 2014年度 | |
|-----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| | 農場数 | 飼養母豚数 | 農場数 | 飼養母豚数 | 農場数 | 飼養母豚数 | 農場数 | 飼養母豚数 | 農場数 | 飼養母豚数 |
| 北海道 | 15 | 4,722 | 15 | 4,406 | 15 | 4,929 | 15 | 5,016 | 15 | 5,096 |
| 東北 | 34 | 26,076 | 34 | 26,310 | 34 | 26,875 | 32 | 25,446 | 33 | 26,438 |
| 関東 | 49 | 14,260 | 47 | 14,885 | 48 | 15,618 | 46 | 14,824 | 45 | 14,598 |
| 北信越 | 10 | 3,687 | 10 | 3,693 | 10 | 3,654 | 10 | 3,544 | 9 | 3,441 |
| 東海近畿 | 3 | 793 | 3 | 758 | 3 | 168 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| 中四国 | 16 | 6,620 | 15 | 6,687 | 15 | 6,629 | 15 | 6,607 | 15 | 7,457 |
| 九州 | 30 | 21,337 | 30 | 22,322 | 31 | 22,998 | 31 | 23,283 | 31 | 23,106 |
| 育成・肥育専門農場 | 33 | | 33 | | 33 | | 33 | | 33 | |
| 全国 | 190 | 77,495 | 187 | 79,061 | 189 | 80,871 | 183 | 78,720 | 182 | 80,136 |

やむを得ない事情により認定を休止している農場については、戸数は集計に含め頭数は含めない。認定農場数は182（GGP・GP農場18、子豚育成・肉豚肥育専門農場含む）で、前年度と横ばい、昨年度減少した飼養頭数は増加し再び8万頭の大台となった。これは、大型の新規農場の入会と小規模農場の退会による。農場形態の大きな変化はみられない。地域別では関東地区と中四国地区の一部に増頭傾向がみられる。全国の飼養母豚数88.5万頭（畜産統計、2014年2月現在）に占める認定農場SPF豚の割合は9.1%と前年度より0.3ポイント上昇した。

CM認定農場の生産成績

(2014年度)

表1 一貫生産農場

| | 件数 111 | 母豚数 平均 | 生産指数 | 農場回転率 | | 農場飼料要求率 | | 出荷頭数/母豚 | | A薬品費/肉豚 | |
|------|-----------|-----------|--------|-------|-------|---------|-------|---------|-------|---------|-------|
| | | | | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 |
| 基準値 | | | 100.00 | 1.70 | 15.00 | 3.19 | 25.00 | 21.35 | 40.00 | 286 | 20.00 |
| A | 28 | 569 | 124.31 | 1.95 | 17.18 | 3.05 | 26.13 | 23.53 | 44.09 | 44 | 36.91 |
| B | 28 | 422 | 113.35 | 1.79 | 15.77 | 3.21 | 24.83 | 21.79 | 40.83 | 116 | 31.92 |
| C | 28 | 527 | 103.73 | 1.82 | 16.07 | 3.25 | 24.53 | 21.72 | 40.70 | 251 | 22.43 |
| D | 27 | 434 | 93.26 | 1.64 | 14.46 | 3.31 | 24.09 | 20.29 | 38.01 | 333 | 16.69 |
| 最高成績 | | 1,565 | 132.10 | 2.12 | 18.70 | 2.86 | 27.59 | 26.63 | 49.88 | 58 | 35.93 |
| 最低成績 | | 1,018 | 83.67 | 1.68 | 14.82 | 3.56 | 22.11 | 19.42 | 36.38 | 424 | 10.36 |
| 平均値 | | 488 | 108.80 | 1.80 | 15.88 | 3.20 | 24.90 | 21.85 | 40.93 | 185 | 27.08 |

表2 繁殖専門農場Ⅱ（分娩・離乳後、子豚を育成し出荷している農場）

| | 件数 10 | 母豚数 平均 | 生産指数 | 分娩回数／年 | | 離乳頭数／母豚 | | 出荷子豚数／母豚 | | A薬品費／子豚 | |
|------|----------|-----------|--------|--------|-------|---------|-------|----------|-------|---------|-------|
| | | | | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 |
| 基準値 | | | 100.00 | 2.30 | 20.00 | 22.53 | 20.00 | 21.43 | 40.00 | 160 | 20.00 |
| A | 3 | 1,113 | 124.15 | 2.46 | 21.43 | 24.79 | 22.00 | 24.17 | 45.11 | 35 | 35.61 |
| B | 3 | 1,369 | 112.19 | 2.29 | 19.95 | 22.39 | 19.88 | 21.82 | 40.73 | 67 | 31.63 |
| C | 2 | 777 | 100.10 | 2.40 | 20.91 | 24.07 | 21.37 | 22.91 | 42.77 | 200 | 15.06 |
| D | 2 | 1,043 | 90.19 | 2.37 | 20.06 | 23.05 | 20.47 | 21.46 | 40.06 | 247 | 9.07 |
| 最高成績 | | 1,222 | 131.40 | 2.43 | 21.14 | 26.27 | 23.31 | 26.05 | 48.62 | 13 | 38.33 |
| 最低成績 | | 1,177 | 88.58 | 2.40 | 20.89 | 23.25 | 20.64 | 20.38 | 38.04 | 248 | 9.01 |
| 平均値 | | 1,109 | 108.96 | 2.38 | 20.72 | 23.58 | 20.93 | 22.67 | 42.32 | 120 | 25.00 |

表3 繁殖専門農場Ⅰ（分娩・離乳後、直ちに出荷している農場）

| | 件数 5 | 母豚数 平均 | 生産指数 | 分娩回数／年 | | 離乳頭数／母豚 | | 出荷子豚数／母豚 | | A薬品費／子豚 | |
|-----|---------|-----------|--------|--------|-------|---------|-------|----------|-------|---------|-------|
| | | | | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 |
| 基準値 | | | 100.00 | 2.30 | 20.00 | 22.53 | 20.00 | 22.53 | 40.00 | 90 | 20.00 |
| 平均値 | | 856 | 119.46 | 2.47 | 21.48 | 25.70 | 22.81 | 25.13 | 44.62 | 43 | 30.54 |

表4 子豚育成農場（繁殖農場Ⅰから離乳子豚を導入し、肥育用素豚として出荷している農場）

| | 件数 2 | 出荷頭数 平均 | 生産指数 | 1日平均増体重(g) | | 出荷率 | | A薬品費／子豚 | |
|-----|---------|------------|--------|------------|-------|-------|-------|---------|-------|
| | | | | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 |
| 基準値 | | | 100.00 | 445.00 | 40.00 | 95.00 | 40.00 | 70 | 20.00 |
| 平均値 | | 47,168 | 146.16 | 531.76 | 47.80 | 99.23 | 67.72 | 33 | 30.65 |

表5 肥育専門農場Ⅱ（繁殖農場Ⅱまたは子豚育成農場から豚を導入し、肥育している農場）

| | 件数 17 | 出荷頭数 平均 | 生産指数 | 農場飼料要求率 | | 出荷率 | | A薬品費／子豚 | |
|------|----------|------------|--------|---------|-------|-------|-------|---------|-------|
| | | | | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 |
| 基準値 | | | 100.00 | 3.30 | 55.00 | 97.50 | 25.00 | 126 | 20.00 |
| A | 5 | 7,862 | 127.87 | 2.81 | 63.14 | 99.23 | 42.30 | 111 | 22.42 |
| B | 4 | 14,995 | 108.99 | 3.37 | 53.92 | 97.75 | 27.50 | 78 | 27.58 |
| C | 4 | 9,401 | 101.92 | 3.80 | 46.70 | 99.04 | 40.40 | 159 | 14.82 |
| D | 4 | 12,136 | 95.22 | 3.69 | 48.50 | 97.88 | 28.82 | 139 | 17.91 |
| 最高成績 | | 4,014 | 148.79 | 2.16 | 73.93 | 99.92 | 49.21 | 90 | 25.65 |
| 最低成績 | | 5,320 | 89.84 | 3.64 | 49.25 | 97.94 | 29.39 | 181 | 11.20 |
| 平均値 | | 10,908 | 109.64 | 3.38 | 53.66 | 98.52 | 35.20 | 121 | 20.78 |

表6 肥育専門農場Ⅰ（繁殖農場Ⅰから子豚を導入し、肥育している農場）

| | 件数 1 | 出荷頭数 平均 | 生産指数 | 農場飼料要求率 | | 出荷率 | | A薬品費／子豚 | |
|-----|---------|------------|--------|---------|-------|-------|-------|---------|-------|
| | | | | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 | 実績 | 指数 |
| 基準値 | | | 100.00 | 3.25 | 55.00 | 95.00 | 25.00 | 223 | 20.00 |
| 平均値 | | 11,819 | 130.32 | 2.68 | 64.64 | 95.22 | 26.11 | 4 | 39.57 |

表7 肉豚または子豚1頭当たりA薬品費使用

一貫生産農場

| 薬品費／肉豚 | 農場数 | 平均金額 |
|-----------|-----|------|
| 100円未満 | 36 | 36 |
| 100円～199円 | 22 | 140 |
| 200円～299円 | 28 | 243 |
| 300円～399円 | 17 | 356 |
| 400円～450円 | 8 | 411 |
| | 111 | 185 |
| 最高 | | 1 |
| 最低 | | 424 |
| 上位25%の平均 | 28 | 44 |

繁殖専門農場Ⅱ

| 薬品費／子豚 | 農場数 | 平均金額 |
|-----------|-----|------|
| 100円未満 | 6 | 51 |
| 100円～199円 | 1 | 151 |
| 200円～280円 | 3 | 248 |
| | 10 | 120 |
| 最高 | | 13 |
| 最低 | | 248 |
| 上位25%の平均 | 3 | 35 |

肥育専門農場Ⅱ

| 薬品費／肉豚 | 農場数 | 平均金額 |
|-----------|-----|------|
| 100円未満 | 8 | 66 |
| 100円～200円 | 9 | 170 |
| | 17 | 121 |
| 最高 | | 13 |
| 最低 | | 197 |
| 上位25%の平均 | 5 | 111 |

ワクチン免疫豚と自然感染豚の識別：浸潤農家ではワクチン接種をはじめてもすべての豚がワクチン免疫豚にはなりません。ワクチンは生ワクチンであって、ワクチン免疫とはワクチンウイルスを豚に潜伏感染させることにほかなりません。そのため、自然感染によって潜伏感染となった豚は感染閾値が上がっていることから未感染豚に比べて免疫されにくくなります。また、潜伏感染の母豚からの移行抗体をもらっている哺乳豚においても同様です。浸潤農場でワクチンを使いながら清浄化を進めるためには、実際どれぐらいの豚が免疫を獲得しているか、自然感染している豚はどれぐらいいるのか把握する必要があります。ワクチンウイルスには抗体検査で自然感染ウイルスと識別できるようにマーカーが付いています。マーカーといってもウイルス蛋白質の一部成分（gI：ジー・ワンと読みます。また、gEと称されることもあります）が作られないようにその遺伝子が欠失している遺伝子欠損マーカーです。自然感染豚においてはgI蛋白質に対する抗体（gI抗体）を含めウイルス抗体が産生されますが、ワクチン免疫豚ではgI抗体を除いたウイルス抗体が作られることとなります。ですから、ワクチン免疫豚に後から自然感染があった場合はgI抗体が陽性に転じ、自然感染豚のウイルス抗体と同様の検査結果となります。逆に自然感染が先で後からワクチン接種しても抗体検査上は自然感染豚のウイルス抗体と区別できません（表）。しかし、いずれも自然感染によって潜伏感染し

清浄化の推進と洗浄・消毒：浸潤県は2014年現在11県で、うち2県はワクチンを使用しているもののすでに自然感染はみつからない状況となっています。浸潤県においてもその地域区分で見れば、着実に清浄地域が増加しています。一方で、浸潤地域においてなかなか清浄化が進まない農場があるのも事実です。特に場内すべてをワクチン免疫豚に置換する段階（ステータスⅡ・後期）からワクチン接種を中止する段階（ステータスⅢ）で清浄化が停滞する傾向があります。ワクチンを接種していても一向に自然感染が減ってこない、ワクチン接種を止めると自然感染が起きるのではないか、ワクチンは母豚だけに接種しておけばいいのではないかなどワクチン効果や利用の誤った考えが停滞理由となっていることがあります。ワクチンは発病を抑えるものであって感染を抑えるものではありませんし、集団免疫という「個」ではなく「群」という考えに基づかなければ効果は発揮されないものです。当然、農場内部に存在するウイルスや農場外部から新たに侵入してくるウイルスを止めた上で、ワクチン接種を行わなければなりません。特にステータスⅡ・後期にあつて、ワクチン免疫豚がいつまで経っても増加してこない場合、農場内の洗浄・消毒が不適切なのかも知れません。また、汚水処理の曝気槽に消毒液が入ると活性汚泥がやられてしまうなど飼養管理上やむを得ない事情もあつて綿密な消毒ができないこともあります。こうした場合は水での洗浄だけでも感染閾値以下の濃度にウイルスが希釈されることが期待され、十分感染源の力を弱めることとなります。洗浄の後に消毒液をかけることはもちろん豚舎や豚房の空舎期間をおくとさらに効果的であることはいうまでもありません。

最後に：オーエスキー病はワクチンを使用しながら自然感染豚を更新していけば、大きな経済損失を受けることなく排除できる伝染病です。清浄県であれ浸潤地域であれ、農場ごとに日常の飼養衛生管理を適正に実施していくことがすべての基本となります。また、オーエスキー病はSPFのSP（特定病原体）の一つでもあります。飼養衛生管理の厳しいSPF豚認定農場が規範となつてわが国のオーエスキー病清浄化を早期実現しましょう。
<参考>『オーエスキー病清浄化の達成に向けて』（公益社団法人中央畜産会、平成26年3月発行）

表 2種の抗体検査による自然感染豚とワクチン免疫豚との識別

| 抗体検査 | | 識別判断 | 対処方針 |
|-----------|--------|---|----------------|
| 全(ウイルス)抗体 | gI抗体 | | |
| 陽性 (+) | 陽性 (+) | ・自然感染のみ ・自然感染→ワクチン免疫 ・ワクチン免疫→自然感染 | 早期更新 (ステージⅡ) |
| 陽性 (+) | 陰性 (-) | ・ワクチン免疫 | 早期更新* (ステージⅢ) |
| 陰性 (-) | 陰性 (-) | ・未感染(清浄) | ワクチン免疫 (ステージⅡ) |

*ワクチンは生ワクチンであるため、ステージⅢ（ワクチン接種中止段階）ではワクチン免疫豚を排除し、未感染豚を増加させていく。

ている豚で優先的に農場外に排除すべき豚であることはわかります。また、ワクチン免疫豚がgI抗体陽性となった場合は何らかの自然感染源が存在していることもわかります。抗体検査によって自然感染の有無だけではなく農場の現況を把握できることから、優先的にどのような対策をすべきかがよく見えてきます。

人間社会に迫り来る大型獣類たちⅣ

岐阜大学応用生物科学部教授 鈴木 正嗣

大型獣類の被害問題をテーマに3回の連載を続けてきましたが、どれも社会的背景や法律・制度等に関わる内容が中心でした。これらの情報は、昨今の鳥獣害の本質を正しく捉える上で不可欠と考えられますが、一方で「被害対策そのもの」に関わる記述が少なかったことは否めません。そこで今回は、イノシシを中心に、その生態や習性を踏まえた被害対策の「落とし穴」について紹介することにします。

◆捕獲は被害対策の特効薬か？

本誌57号では、鳥獣保護法から鳥獣保護管理法への改正を機に導入された「鳥獣捕獲等事業者」について紹介しました。しかし無計画で闇雲な捕獲では、被害対策としての成果は期待できません。

子イノシシ（以下、ウリボウとします）に偏った捕獲が、その一例です。ウリボウは警戒心が低いため、親に比べ格段に罠に入りやすいとされています。が、この特徴に気を良くしてウリボウばかりの捕獲を続けると、これは親イノシシに対する実質的な「強制離乳」として働きます。その結果、年1回の春の出産が普通のイノシシに秋の出産を誘発させ、当初の捕獲の成果が帳消しとなる可能性があります。なお、ウリボウの捕獲を防ぐには、罠の仕掛け糸（これに動物が接触すると扉が閉まる）を高い位置に設置し、親のみが接触できる構造とすることが有効とされています。

耕作地から遠すぎる場所や完全な山林内での捕獲も要注意です。この方法では、加害個体以外の動物ばかりが獲られ、肝心の真犯人が放置されることになるためです。動物行動学的な情報にもとづき、真犯人を的確に捕獲するには、「被害発生地点から200mから600mの範囲内での罠がけ」が効果的とされています。

◆光・音・臭いによる忌避効果は期待できるか？

イノシシが嫌がる（近寄らない）とされる光や音、臭いを発する数々の製品が市販され、その忌避効果が報道されることも少なくありません。しかし多くの場

合、その忌避効果は一時的とされています。一時的であるのは、単に見慣れない刺激やモノの存在にイノシシたちが警戒しているだけであり、実害がないことが認識できれば程なく慣れてしまうためです。さらに、光、音、臭いなどの刺激で注意しなければならないのは、「これらを発するモノの付近には、美味で栄養豊富な農作物がたんまりと存在する」ことを、動物の側が学習する恐れがあるという点です。こうなってしまうのは、製品の設置自体が全くの逆効果を生むことになります。

前述のとおり、光や音、臭いを発する市販品は少なくなく、価格も決して安くありません。鳥獣害対策を効率的に進めるためにも、これらの製品の導入にあたっては、慎重な事前チェックが不可欠であることが指摘されています。

以上のとおり、鳥獣害対策とは言わば「人間と動物との知恵比べ」です。そして現実には、不適切な思い込みにより、人間の側が負けているケースがしばしば認められます。スペースの関係で言及することはできませんでしたが、侵入防止柵の張り方にも数々のノウハウがあります。このような「知恵比べ」に興味を持たれた方は、ぜひとも下記の参考文献を手にとってみてください（本稿で言及した注意・留意事項の多くが、これら書籍からの引用です）。イノシシを初めとする多様な動物種の習性や被害対策の手技・手法等について、多くの情報を得ることができます。

<参考文献>

江口祐輔（2003）『イノシシから田畑を守る』農山漁村文化協会、東京。

江口祐輔監修（2013）『動物による農作物被害の総合対策』誠文堂新光社、東京。

小寺祐二（2011）『イノシシを獲る』農山漁村文化協会、東京。

紹介●SPFのお店23
◆特別編◆

大館さくら豚 (ブランド販売・秋田県大館市)

秋田県大館市といえば、特産の比内地鶏ときりたんぽ、また「忠犬ハチ公」のふるさととしても有名です。

その大館市が市を挙げて取り組んでいるのが、地元にある認定G G P農場・(株)シムコ大館G G Pセンター産のSPFポークのブランドづくりです。その名も「大館さくら豚」。年間わずか400頭しか出荷されないデュロック種雌豚肉のみを対象にし付加価値としました。地元にある農場産の豚肉を比内地鶏に次ぐ特産品に、との思いから始まりました。

前号の「SPFのひと」のページでもご紹介しましたが、同農場が大館市に新設されたのは2012年。肉豚出荷が始まったのを機に市が中心となり、地元精肉店、ホテルや飲食店などが協力、まさに「地産地消」に取り組むことに。昨年秋からブランド出荷を開始、今年から本格的に展開しています。

ブランド名は市がホームページを使って公募、350を超える候補の中から決定、昨年秋に行なわれた地元の産業祭ではPRブースを設け、試食会を実施、アンケート調査も行ないました。

精肉店組合である秋田県食肉生活衛生同業組合大館支部はブランドシールを作成、店頭販売で活用しています。支部長の田村精肉店社長・田村ヨシ子さんは「透明感があってアクが出ない。鍋が汚れない肉です。一度買ったお客さんはリピーターになってくれますよ。子どもがこの豚肉しか食べないからとわざわざ買いに来る方も。濃い味付けはもったいない。せっかくの素材を活かした料理で食べてもらいたいですね」とプロから見ても高い評価です。また、「比内地鶏だけに頼ってはいけません。せっかくこんなおいしい豚肉があるんだから地場産として地元で普及させて、町の活性化につなげたいですね」。



田村精肉店の皆さん。左端が社長の田村ヨシ子さん

大館さくら豚のチラシ (上) どのぼり



大館さくら豚が味わえる店、こらんしょ。店主の斎藤信子さん (右) とスタッフの花田あゆみさん

取り扱い店は市内精肉店が5軒、ホテル・レストラン・居酒屋、温泉施設等が14軒 (昨年11



昨年10月の産業祭で行なわれた試食会の様子

月現在)。そのひとつ、居酒屋「こらんしょ」の店主、斎藤信子さんは「この肉は冷めてもおいしいんです。おみやげにと料理を持ち帰るお客さんも多いです」と太鼓判。

出荷頭数が限られるため注文数に追いつかないという、稀少価値ならではの悩みはありますが、市内のあちらこちらで見かけた「大館さくら豚」ののほりから、地元の熱意が伝わってきました。

●協会からのお知らせ●

●理事会を開催

平成26年度の理事会を3月27日(金)、協会事務所に開催し、6月の総会に諮る議事等について協議いたしました。

●代議員会を6月に開催

今年度の代議員会(社員総会)は6月11日(木)開催の予定です。代議員の皆さまには後日ご案内をお送りいたします。次号に詳細を掲載いたします。

味噌チーズトンカツ

●レシピ提供・和食居酒屋「いちい」料理長 坂本 美知磨（北海道函館市）

今回は定番のトンカツが八丁味噌とチーズという意外にも相性抜群の組合せでおしゃれに変身です。お皿にソースをしいて盛り付けると、見事なレストランメニューになりました。ぜひお試しください！

●材料●（2人分）

SPF豚ローススライス肉 4枚
八丁味噌 適量
大葉 2~3枚
チーズ 適量
塩・こしょう 適量
卵 適量
小麦粉 適量
パン粉 適量
イタリアンパセリ（あれば） 適量
揚げ油 適量

A（ソース）
ケチャップ 20g
マヨネーズ 30g
レモン汁 少々



●作り方●

- ① 豚肉に塩・こしょうをふり、包丁の背でたたいてのばします。
- ② ①の片面に八丁味噌をぬり大葉をちぎって散らした上にチーズを乗せて巻きます。つまようじで2か所くらいとめておきます。
- ③ 小麦粉・溶き卵・パン粉の順につけて、170℃の油で3~4分揚げます。
- ④ Aのソースの材料を合わせて皿に盛ります。その上にカットした③を乗せます。イタリアンパセリをかざってできあがりです。

【坂本シェフからのアドバイス】

肉は揚げ過ぎないように注意しましょう。油から揚げたら2分ほどそのまま置き、余熱で中まで火を通して下さい。

●ポークリーフレットを増刷いたしました

認定農場産SPFポーク販促資材としてご好評いただいておりますリーフレット（A6判、4ページ）の最新版（Vol.5）が完成いたしました。会員の皆さんや

認定農場産SPFポークを販売されている小売店、関係者には無料でご提供いたします。ご希望の方は事務局（TEL.03-5835-5375、FAX.03-5835-5376）までご連絡ください。

●認定情報●

●平成26年度認定農場

[3月認定]（有効期間：平成26年3月12日から27年3月31日まで）
北海道・全農飼料畜産中央研究所上士幌種豚育種研究室、秋田県・（有）十和田湖高原ファーム、全農畜産サービス（株）由利本荘SPF豚センター、（株）シムコ大館GGPセンター、宮城県・サンエス丸森農場、（株）シムコ岩出山事業所、茨城県・（有）中村畜産、全農飼料畜産中央研究所、千葉県・石毛章俊養豚場、鈴木治彦養豚、飯田養豚、（株）シムコ館山事業所、（有）ピギー・ジョイ第2農場繁殖農場、同肥育農場、（有）伊藤養豚飯岡農場、（有）籾木ピッグファーム、平野英夫SPF豚農場、長野

県・（農）エスピーエフこがねや第二農場、JA全農長野SPF繁殖センター、JA大北白馬アルプス農場、富山県・（株）シムコ八尾GGPセンター、島根県・奥出雲ファーム（有）、愛媛県・JAえひめアイツパクス（株）天貢ファーム、熊本県・全農畜産サービス（株）西日本原種豚場、（有）七城SPFファーム、（有）やまとんファーム、（有）ピッグファーム陳、宮崎県・（有）守山畜産、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産（株）出水農場、同阿久根農場

（以上30農場）

※次回認定委員会は平成27年6月4日の予定



平野英夫SPF豚農場

平野 賢治さん
恵さん

●千葉県木更津市

幸せオーラあふれる後継者夫婦 家族でこだわりの豚肉づくり

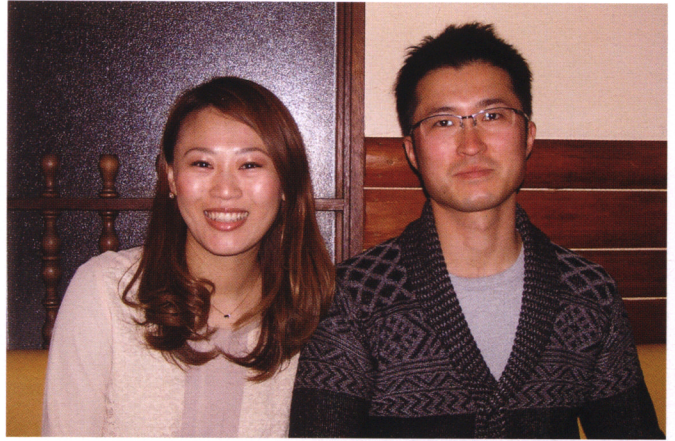
今号の「ひと」には協会関係では珍しい(失礼!)
美男美女、華やかでおしゃれなご夫妻にご登場いただき
ました。

平野英夫SPF豚農場は、千葉県でいち早くSPF
養豚に取り組んだパイオニア的存在の認定農場です。
父である英夫さんの後継者、賢治さんは3人兄弟の2
番目、子どもの頃から一番農場の手伝いをしていたと
か。「動物が好きでしたから、苦にはなりませんでした
ね」。パン屋さんの経営などを経て、23歳のときに肉豚
舎の新設を機に本格的に農場に関わり、今年で15年にな
ります。

11歳年下の看護師の恵さんとの出会いは5年前、地
元木更津市の住宅街にある隠れ家レストラン。おおい
いと評判の、平野農場産SPFポークにこだわるオー
ナーシェフが営むお店(次号で紹介)が結びの神です。

すぐにお互い惹かれ合ったものの、結婚までには4
年近い歳月を費やしました。「私はすぐにでもと思った
のですが、なかなか、うんといってくれなくて…」と
恵さん。「今考えると、私のことを思ってくれてのこと
でしたね」。家業の養豚業の大変さを考えた、賢治さん
のやさしさだったようです。

契機となったのは英夫さんが体調を崩されたこと。
手伝いを買って出た恵さんを分娩舎へ。いきなり子豚



平野さんご夫妻

の去勢をやってもらったそうです。「耐えられるかどう
か、試したところもありました」と賢治さん。そこは
プロの医療従事者である恵さん、予想に反して苦もな
く作業をこなしたそうです。「これなら大丈夫だと思い
ました」(賢治さん)。

恵さんは「他の農場を知らないし、こんなものなの
かなと思いましたよ」。結婚後は看護師と農場の仕事が
半々の日々だそうです。「ちょうどいい働き方ですね。
豚の方がいいかも。ナースコール押さないし(笑)」。今
は主に賢治さんのお母さんと3人で、130頭規模の農場
を切り盛りしています。「お母さんは“神”ですね。技
術も人柄もすごいです」と夫婦で絶賛。平野家はどう
やら嫁姑問題とも無縁のようです。

お話をうかがったのは延び延びになっていた新婚旅
行直前。もちろん楽しみではありますが、長い期間留
守するとあって、2人とも「農場が心配で…」。

これからの夢は?とお聞きすると「いっぱいあるよ
ね」と賢治さんを見つめる恵さん。幸せオーラにあふ
れたお二人に、こちらまで幸せをいただいた、大変楽
しい時間でした。(編集部)

編集後記

予想に反して寒く雪の多い冬もようやく終わりを告げ、桜のたよりとともに新年度のスタートとなりました。昨年度はPEDが大問題となり、認定農場も無関係ではすまされなかったことは大変残念でした。現状にきちんと対応できている協会、認定制度なのかどうか、検討すべき課題も多いと思います。一つ一つ真摯に取り組んでいきたいと思っております。皆様のご協力をお願いします。

事務局の都合で今号の発行が遅れました。執筆者はじめ関係各位にご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。(S)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは
日本SPF豚協会 の
登録商標です

日本SPF豚協会だより

第59号 2015年4月1日発行(季刊)

発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail: j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/

発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀